ストライクウィッチーズ　転生者の日々

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ストライクウィッチーズ　転生者の日々

【Ｎコード】
Ｎ３８４８Ｒ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
ストライクウィッチーズの二次小説です。
オリジナルキャラが主人公で、まだしばらくは原作に入りません。
転生者ですが、チート的な要素はほとんどありません（しかし、いくらか原作の知識はあります）。
更新は不規則です。それでもいいという方は、ぜひどうぞ。

プロローグ

転生（てんせい，　てんしょう）とは、死後に別の存在として生まれ変わること。肉体・記憶・人格などの同一性が保たれないことから復活と区別される。が、小説などではいくらかの記憶を受け継いでいる、という内容がほとんどであり、どちらかというとその概念のほうが私は好みである。

しかし、これはあくまで読者としての、第三者としての意見であり、何も自分自身が転生したい、というわけではない。

それが私、天宮雨音（あまみやあまね）の主張である。

それなのに・・・。

「まあ、見て。あんなところに子供が」

「かわいそうに・・・」

いつの間にか、知らない場所に来ていました。

・・・・

・・・ハッ！どうやら、意識がとんでいたようだ。

いけない、いけない。

少し、振り返ってみよう。

私は確かに、はまっている小説の続きを買いに本屋まで出かけ、購入した本を片手に店を出たところで、突っ込んできた一台のトラックにはねられたはず。

あの時は、ああ死んだな、って思ったけれど。

これはもしや夢か？

「っ・・・」

頬をつねってみたけれど、特に変化なし。ジンジン痛む頬は別と

して。
そんな私を、通り過ぎていく人たちがジロジロと見てくる。・・・
うう、恥かしい。

「ねえ、君」

突然、後ろから声をかけられた。

「・・・？」

振り向いた私の目の前には、ブロンドの長い髪を持つ一人の女性が立っていた。
え、外人さん？！しかも、すごい美人！思わず固まる私を見て、優しく微笑んだ美人さんは、私の目線に合わせるようにしゃがんだ。

「ねえ、君一人なの？お母さんやお父さんは？」

・・・はい？
いや確かに、私は１５６センチで１９歳には見えない童顔だったけれど、そんな５、６歳の子供に聞くような台詞を言われるような年には見えないはずだ。思わず反論しようとして、

「・・・！・・・・・！」

声が出ないことに気づいた。怒鳴るような勢いでしてみても、やはり声は出なかった。

「君、声が・・・出ないの？」

その私の行動にさすがに気づいたのだろう、美人さんも真剣な表

情になって私に尋ねた。
コクン。
私が頷くと、美人さんは少し考えるようにうつむいた後、いきなり私を抱えて立ち上がった。
ええ！？
予想もしない行動に、私は手足をばたつかせる。そんな私を安心させるように美人さんはほほ笑んだ。
「大丈夫。君を安全なところに連れて行ってあげるから、落ち着いて」
そう言って頭をなでられる。くすぐったくて、でも温かくて、なぜか涙があふれた。私の涙を拭いながら、でも、と美人さんはつぶやいた。
「こんな小さな女の子を捨てるなんて・・・」
そのつぶやきに、思わず耳を疑った。
小さな？え、そんなに小さい？
困惑した私の視界に、お店のウインドウが入る。
太陽の光が屈折して鏡のようなそこに写るのは、
「・・・！？（ど、どういうことー！？）」
美人さんに抱えられた、５、６歳くらいの小さな女の子がいました。
～異世界へようこそ～
（それは、新たな人生）

next continue…

第一話（前書き）

ここから始まる。

第一話

「――はい、着いたわよ」

美人さんの声で私は目を覚ます。どうやら、眠ってしまっていたらしい。意識がはっきりしてくると、先程の光景が再び浮かび上がってきた。なぜ、私は退化しているのだろう？しかもよく見てみると、日本人の証である黒髪ではなく、長いブロンドの髪だ。おそらく、瞳の色も茶色ではないのだろう。ということは、退化ではない。これは元の私の身体では無いのかもしれない。

「おーい？起きてるー？」

気づけば、美人さんが私の顔を覗き込んでいた。思考の海に流されていた私は、驚いて美人さんの腕の中いたことを忘れ、身を離そうとした。

「・・・っ！」

「っとと！セーフ・・・」

転げ落ちそうな私の身体を慌てて抱え直した美人さんは、軽く私の頬を突いた。

「こら駄目じゃない、いきなり動いちゃ」

「・・・」

「まあ、もう歩けるよね？」

美人さんがゆっくりと私を地面に下ろしてくれる。小さい足でしっかりと地面を踏み締める私を見て、美人さんがよし、と頷いた。

「それじゃ、行こうか」

頷いた私の手を取り、歩き出す。周りはどうやら庭らしい。花壇やスコップなどが視界に入った。耳を澄ますと、かすかにだが子供の声も聞こえる。学校だろうか？そんなことを考えていたら、いきなり美人さんが立ち止まった。

「はい、ここよ」

「・・・・」

白い石造りの壁に、色あせているステンドガラス。建物の頂点には白い十字架。・・・どこからどう見ても、そこは教会だった。ここって言われても・・・。そんな私の横を通り、美人さんは自分の家のように教会の扉を開けた。

「ただいまー！今帰ったよー！」

美人さんのその声が終わらないうちに、教会のあちこちから5，6人の子供たちが走ってきた。

「おかえりー！」

「おかえりなさい！」

「ただいま。サイモンは？」

いったん私から手を離した美人さんは、抱きついてきた子供たちの頭を優しく撫でて尋ねた。

「僕ならここですよ、ジュディ」

教会の奥から、金髪の穏やかそうな男性がやってくる。

「あ、ただいまサイモン」

「お帰りなさい、ジュディ。・・・その子は？」

美人さんから私に視線を向けた男性は首を傾げる。

「町で見つけたの。おそらく、置いて行かれたのね」

子供の前ではさすがに捨てられた、とは言えないのか、遠回りな説明をする美人さん。男性もそれで通じたのか、小さくうなずいた。

「そうか・・・。この子はそれを？」

「分からないわ。この子、話せないようなの」

その言葉にはさすがに表情を変えた男性。私に近づいた男性は、私の視線に合わせるようにしゃがんだ。

「僕は、サイモン。サイモン・F・クロムウェル。こっちは、ジュディス・L・クロウェル。君、自分の名前は分かるかい？文字とか、書ける？」

フルフル。頭を左右に振ると、サイモンさんは困ったようにジュディスさんを見た。

「困ったね、これじゃこの子をどうやって呼んだらいいんだろう？」

「そうね・・・。あら？・・・そのまま動かないでね」

私へ近づいたジュディスさんは、私の首の後ろへ腕を回す。パチン、と金属の外れる音がすると同時に、ジュディスさんが私から身

体を離した。

「サイモン、これ見て」

「これは、ペンダント？」

ジュディスさんの手にあるのは、銀色のロケットペンダントだった。多分、私の首に掛かっていたものだろう。ペンダントの裏をジュディスさんが見て、声を上げ、横から見たサイモンさんも目を丸くする。

「サイモン！これ・・・」

「ん？・・・これは・・・！」

裏に何かあるのだろうか。しばらくして、ジュディスさんが私にペンダントを渡した。

「勝手に見ちゃってごめんなさい。このペンダントの裏、見てみて」

ペンダントをひっくり返すと、文字が刻印されていた。

Ｏｌｉｖｉａ　Ｅｕｎｉｃｅ　Ｌａｍｂｅｒｔ

「オリヴィア・ユーニス・ランバート・・・そう書いてあるわ」

「ランバートというと、最近強盗に襲われた家の名だ。確か、一人娘がいたはず」

「これが本当なら、そのショックで話せなくなったのかも知れないわね」

なんだろう、この文字を見たら、とても悲しくなってきた。目の奥が熱い。

二人が私を見てぎょっとする。

「え、どうして泣いてるの！？」
「ショックで記憶は無くても、脳は覚えているのだろうね・・・」
頬に手をやると、生温かい液体で濡れていた。ああ、泣いてるのか。自覚すると余計に止まらなくなる。服の袖で拭おうとして、ジュディスさんに抱きしめられた。思わず身体が強張る。
「！？」
「思いっきり泣いていいのよ。これから家族になるんだから」
「また君はいきなり・・・。まあ、君が望むならね」
ジュディスさんとは反対の向きから私を抱きしめるサイモンさん。私を見つめる二人の視線はとても優しくて、身体もなんだか温かい。私は腕を持ち上げ二人の身体に回すと、聞こえないとは分かりつつ、唇を動かした。
『ありがとう』
「・・・え！？」
「今のは・・・」
身体を離した二人が驚いたように私を見た。
「今、この子の声が聞こえたような・・・」
「僕もだ・・・」
私は首を傾げる。声は出ていないはずだけど？そう思いつつ、もう一度話してみることにする。
『えっと、聞こえますか？』

今度は少し大きめに、はっきりと声を出すイメージで。すると、ジュディスさんがとても嬉しそうに私を抱きしめた。

「聞こえてるよ！良かった！」

「というか、君、その格好は・・・」

『え？』

サイモンさんの言葉の意味がわからない私へ、ジュディスさんが私の頭を指差した。頭？頭に手を伸ばすと、艶やかな髪と、ふわふわな毛の感触が・・・毛？慌てて両手で確認すると、まるで動物のような耳が生えていた。

「そこだけじゃないわよ」

ジュディスさんがクスクスと笑いながら、今度は私のお尻を指差した。恐る恐る手を後ろにやると、ちょうど尾骨の辺りにフサフサした長い尻尾が生えていた。

『な、何これ・・・』

「動物の耳と尻尾、ということは・・・」

「まさか、ウィッチだったなんてね」

ウィッチ？魔女？なんで、動物の耳と尻尾が生えたらウィッチなの？脳内がオーバーヒートを起こしそうになる私に、ジュディスさんが告げた。

「ま、それは後でいいか。・・・とにかく、ようこそ！新しい家族へ！」

『今説明してーーー！』

なんだか、色々と大変なことになりそうです。

（ｎｅｘｔ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3848r/

ストライクウィッチーズ　転生者の日々

2011年3月21日16時14分発行